

本居宣長記念館所蔵『諸疾目録回春病門次第』

—本居宣長の医学への味岡三伯の影響—

吉川 澄美

北京中医薬大学日本校

本居宣長の医学修行は宝暦2年3月から7年10月までの京都遊学中にある。宝暦2年3月掘景山へ入門、そして翌3年7月に堀元厚へ入門し、本格的な医学修行が始まる。そして半年も経ずに元厚が亡くなった後は小児科医、武川幸順へ入門した。宣長の医学修行を反映した資料として『折肱録』『方彙簡巻』、また医論として友人への手紙『送藤文興還肥序』が知られている。他に医学関係では診療記録として『済世録』がある。これらは、いずれも本居宣長全集（筑摩書房）に収載されているが、収載に漏れた文書として本居宣長記念館所蔵『諸疾目録回春病門次第』（宣長筆による写本）がある。執筆時期については確定されていないが、おそらく京都在住時のものではないかと想像される。

その目次には、龔廷賢編纂の『万病回春』の約百の病門がほとんどそのままの順で掲示されているものの、本文の内容は『万病回春』を踏まえているわけではない。冒頭に「諸病に病因病名病証と云事あるなり。是を辨ふる事、医者たる者の第一の事なり。此の三つの者を能く知れば、療治する時に於いて一度一度に療治本の其れ其れの病門を見ずして療治がなることなり」と書かれているように、病因・病名・病証の関係を弁述するという執筆意図が窺える。しかしながら各病門の文章量は1行から60行までかなり差がある。例えば中風門のように三者の関係を明示的に論じたものもある一方で、病名や病証名の語義に力点が置かれているだけのものなど、すべての病門について形式的に貫徹されているわけではない。また部分的に、蘆川桂州の『病名彙解』を想起させるような説明もあり、両者の関係も検討の余地がある。

この写本は、宣長が特定の成書をそのまま書き写したり、要約したものなのか、あるいは宣長自身が複数の医書を参考にしつつ、自ら受けた講義を反映してまとめ上げたものなのかについても詳細な分析を要する。

本文書の興味深い点として、医経やその注釈の引用があり、その解釈に対して誤りを指摘したり批判や評価を加えている事が挙げられる。後の宣長の国学における著作でも先行注釈に対して誤りの指摘や評価を活発に行うスタイルが特徴的にみられ、それと一脈通じるようにも見受けられる。

ところで『諸疾目録回春病門次第』の目次の後には「味岡三伯発明」と記されており、本文中にも「三蔵伝授」または類似の表現が複数箇所出現している。「三蔵伝授」は上焦（心）・中焦（脾胃）・下焦（腎）を骨子とした言わば「三蔵論」という体系の伝授である。その内容は『続医学至要鈔』（元禄16年刊「臨床漢方診断学叢書第二十四冊」収載）、『三蔵弁解』（中俊貞、小川朔庵の弟子による講義録、早稲田大学所蔵）から窺うことができ、『医学三蔵弁』（岡本一抱）、『内経病機撮要弁証』（森嶋玄勝）、『内経拔書』（国立公文書館内閣文庫）などにも反映されていることから、味岡三伯の門下生へ代々継承されてきたものだと見なせよう。宣長もまた堀元厚—小川朔庵—味岡三伯（初代：1629～1699）という師弟関係を辿ることができ、「三蔵伝授」を医学修行の最初に相伝されたのではないかとと思われる。例えば、宣長唯一の医論『送藤文興還肥序』にも「真気」・「一气」などのキーワードの用い方から「素霊派」味岡三伯の医学系統の影響を踏まえたものとして読み直すことが可能である。本発表では、『諸疾目録回春病門次第』の概要ならびに宣長の医学修行と味岡流医学との関係についての考察を交えることにする。